

【ポスター発表】

高齢者の老いの受けとめと要介護期・終末期の医療と生活に関する意思形成
—高齢者同士の語り合いを3か月間実施した結果報告—

○ 神戸女子大学 川喜田 恵美 (009330)

キーワード：高齢者 終末期医療 意思形成

1. 研究目的

本研究は地域に暮らす高齢者が高齢者同士で語り合う中で、老いを受けとめ、要介護期と終末期にどのような医療を受け、どのような生活をしたいのかという意思を形成するプロセスとその要因を明らかにすることを目的とするものである。

今回、本調査実施前に予備調査としてA県のシニアボランティアに所属している高齢者6名に対してアンケート調査および高齢者同士の語り合いを3ヶ月に渡り3回実施した。そこで高齢者が老いをどのように受けとめ、要介護期・終末期の医療と生活をどう過ごしていきたいと考えているのか現在の意思や準備していることなど現在考えている意思がどのようなものであり、また語り合いをすることでの意思形成の変化について得られた結果と今後の課題について報告する。

2. 研究の視点および方法

1) 予備調査の実施方法

(1) 対象者：A県のシニアボランティアに所属している高齢者6名

(2) 対象者の選定条件：①65歳以上85歳以下の高齢者、②重度の難聴や言語障害などがなく、コミュニケーションがとれる高齢者、③精神状態が安定している高齢者、④1時間～1時間半の高齢者同士の語り合いに全部で3回の参加が原則可能な高齢者、⑤研究に参加の同意が得られた高齢者

2) 調査期間：平成28年9月～平成28年11月

3) データ収集方法：研究対象者全員に基本調査としてアンケート調査を実施後、テーマについて自由に語り合う高齢者同士の語り合いを社会福祉協議会の施設にて、1回約90分を計3回実施した。第1回目のテーマは「老い」、第2回目は「介護を受けること」、第3回目は「終末期における意思決定」とした。

4) データ分析：データはそれぞれの回毎に観察記録から逐語録を興し、主要な言葉を抜き出し、コード化、カテゴリー化し、各回のテーマにおける研究対象者個々人の意思とともに、全体としての意思を比較した。また語り合いの回の始めと終わりでの意思の変化がどうであったか、さらに回を重ねることで研究対象者の意思形成の変化がみられたどうかについても分析を行った。また今回は予備調査であることから、テーマの内容や表現方法、介入方法などに課題があるかについても確認を行った。

3. 倫理的配慮

本研究は、研究対象者に対して、研究の趣旨と目的を口頭及び文書にて説明し、研究協力の同意を得てから実施した。説明した内容は、研究に参加しなくても不利益を受けないこと、同意してもいつでも中止できること、個人情報取り扱いに留意すること、データの管理方法、研究結果の発表方法などについて分かりやすく、対象者個々に説明を実施した。また研究者が所属する組織の倫理委員会の承認(承認番号 2016-6)を経てから実施した。

4. 研究結果

今回、地域居住の高齢者に老いや介護を受けること、終末期の意思決定について3回の語り合いを実施した。初回の語り合いのテーマである「老い」については現在の自分や身近にいる人の状態を見て老いを認識することができているが、今後自分がどうなっていくのかについては、予測することができず、またあまり考えないようにしていた。全体に共通してみられたのは、「このままでいたい」という思いであり、介護を受けなくても良いように予防(食事・運動・外出・健診)に力を入れていることであった。第2回目の「介護を受けること」については、自分の状況において考えることが難しく、今は介護をする側であること、まだ先のことで自分のこととしては考えることができていなかった。第3回目の「終末期の意思決定」についても具体的な状況が起こらないと考えることが難しく、延命治療などの言葉の理解はしているが、治療内容の詳細、様々な延命治療があることについては理解できておらず、終末期の意思決定は胃瘻を造るかどうかという認識の高齢者が多くみられた。意思形成の変化については、各テーマで話す中で、始めにそれぞれの高齢者が考えていたことや具体的でなかったことに関しては、他の高齢者の介護経験や病気の体験を聞く中で、新たな知識や情報を得、また他者の死生観などを知り、自分と比較したり、自分の立場に置き換えて考えることができていた。さらに語り合いの回を重ねるごとに自分の事として捉えていくことの必要性を認識し、最後の回では、「今後、終末期について子どもと話し合いをする」、「これまで介護や最期について全く考えてなかったが考えるきっかけになった」などの意見が出された。高齢者個々人の意思形成の変化については、介護経験、病気や手術をした経験、配偶者との死別が大きく影響していた。

5. 考察

老いは今まさに自分に起こっていることであり認識しやすいが、今後介護を受けることや終末期の意思決定については、これから先のことであり、考えることを避けたい内容でもあり、自分事として具体的に捉えることには差がみられた。予測しにくく、またこれまで認識していなかったところについて意思を形成していくためには、今後より明確に高齢者に起こりうる状況や終末期によくある事例などを提示し、具体的にイメージができるようにすることが必要である。また意思を形成するにはこれまでのライフイベントも大きく関わっていることから、高齢者個々人の死生観やこれまでの人生の出来事などについても丁寧に話を聞き、関連させながら分析をする必要があることが分かった。